

青いスピズ

読んで見つける、新しい世界、新しい自分

読み物機関誌

春

2025
第6号

作品募集・入選作品

「がんばれ、兄ちゃん」
オガワメイ

安田夏菜

天川栄人

古賀及子

木下政人

伊藤ハムスター





わたしの大切な場所

安田夏菜

絵・吉田尚令

青いスピンの 目次

- 1 創作「わたしの大切な場所」 安田夏菜
- 9 創作「ココロノオト」 天川栄人
- 16 作品募集・入選作品「がんばれ、兄ちゃん」 オガワメイ
- 22 エッセー「無理して気持ちを書かない日記」 古賀及子
- 24 科学エッセー「好きなことを続けていけばいいよ！」 木下政人
- 27 イラストエッセー「学校あるある」 伊藤ハムスター
- 28 コラム「目で読むSDGS図鑑」
- 30 コラム「世界の友だちの一日」
- 32 第三回「青いスピン」作品募集結果発表

「スピン」って、何だか知っていますか？

本に付いている細いリボン、

しおりひものことです。

読んでいた本からはなれるとき、

ページにそっとスピンをはさんでおけば、

またいつでも、

その本の世界にもどることが出来ます。

そして、「青」は、

青春や青空をイメージさせる色。

これから未来へ羽ばたくみなさんの色です。

「青いスピン」と名づけたこの冊子には、

物語からノンフィクション、イラストエッセーまで

さまざまな読み物を集めています。

青いスピンを手がかりに、

あなただけの新しい世界を見つけてください。

五時間目は図工の時間だった。図工室にただよう、水彩絵の具の匂い。

みんなは、それぞれのタブレットと画用紙を机に置き、交互に見ながら絵を描いている。何か写真に撮ったものを、描いているようだった。ちらりと見たけれど、うまいと思える絵は一枚もない。僕は、机にうつぶせになって目を閉じた。やはり保健室で、寝ていたほうがよかったと思う。

ウクライナから日本に避難してきたのは、春だった。戦争はどんどんひどくなっていた。ミサイルが飛んできたり、爆弾が落とされたりした。病院にも、教会にも、発電所にも。

そして、僕の大切な場所も破壊された。黄色に実るはずだった、父さんの小麦畑は黒焦げになり、通っていた学校も、将来入りたかった学校も灰色のがれきになってしまった。

父さんは兵士になって、戦いに行った。

「なあに、こんな戦争、すぐに終わらせてやるさ。」

そう言って笑顔で戦場に行き、最初はビデオ通話もできたのに、そのうち連絡が来なくなった。

「心配ない。父さんは今、電波のない遠い場所で戦っているだけだから。」

母さんはそう言った。

「でも、しばらく帰ってこれないから、わたしたち、日本の大おぼさんの所に避難しない？」

大おぼさんは、母さんのおぼさんだ。日本人と結婚して日本に住んでいる。小さなときに一度だけ会ったきりで、顔も覚えていないけど。

「それがいちばんいいと思うの。ね、イーゴリもルダも、安全に暮らせるわ。」

「やだー！ ルダはここがいい。どこにも行かない！」

そう言って泣く四歳の妹を、僕はなだめた。「陽気なイーゴリ」と友達に呼ばれていた僕は、小さい子をあやすのが得意だった。

「ルダ、兄ちゃんも母さんに賛成だな。日本では爆弾の代わりに、すしが落ちてくるんだぞ。」

「しかもその、すしってやつは、舌がとろけるほどおいしいんだ。」

「食ったらアニメのヒロインみたいに、かわいく変身できるんだぜ！」

おどけたポーズでそう言ってやると、ルダは泣きやみ、ちよつと笑った。

そうして僕ら三人は日本へ来て、とりあえず、大おぼさんの家の二階に住むことになった。

あの頃の僕は、まだ「陽気なイーゴリ」だった。なぜって希望があったからね。

そのうち戦争は終わり、僕らはウクライナに帰り、また父さんともいつしよに暮らせるようになる。そしたら小麦畑は復活するし、通っていた学校も目標にしていた学校も、そのうち建て直される。そう信じていたからね。

けれど戦争は終わる気配もなく、さらに僕は、信じたくもない事実を知ってしまったんだ。

「あなたはデニスが亡くなったことを、いつまで秘密にするつもり？」

夜中にトイレに行こうとして、大おぼさんの声を聞いてしまった。デニスとは、父さんの名前だ。

「わからない。」と、母さんは泣いていた。

「わたし自身、まだ本当のことだとは思えなくて……。」

僕は足音を忍ばせて部屋にもどると、布団を頭からかぶった。

大好きな父さんは、戦死していた。もう二度と会えない。小麦は二度と実らない。

日本に来ることをいやがっていたルダは、意外にもここになじみつつある。

おいしいお菓子攻撃、人気アニメ見放題攻撃、好きなキャラクターの、カプセルトイ攻撃。

大おぼさんによる平和な攻撃の数々に、ルダはだんだん明るくなった。保育園にも行き始め、最初は泣いていたけれど、日本の歌や折り紙を教わって、機嫌のいい日も増えてきた。

けれど僕の心は闇だった。歩いて二キロほど先にある、小さな小学校。ここは日本でも田舎のほうらしく、各学年一クラスしかない。みんなが幼なじみという六年のクラスに、日本語もわからない僕が入っていくのだ。ひたすら気が重い。父さんの死を知ってしまった今となつては、なおさらだ。クラスメートたちは、気味が悪いほど親切だった。

最初の日、「ドーブリー・デーニ（こんにちは）」とクラス全員がウクライナ語で声をそろえ、一斉にパチパチと拍手をした。担任の女性の先生は、僕を空いた席に案内すると、タブレットの翻訳アプリに機関銃のように日本語を打ち込んだ。

《はじめまして。わたしたちはイーゴリさんを、とても歓迎しています。》

変換されたウクライナ語を見ると、うれしいというよりお尻がもぞもぞして居心地が悪かった。隣の席の女子が待ちきれないようにタブレットをひったくり、また新たな言葉を打ち込んだ。

《みんなで、翻訳アプリの使い方を学びました。何でもここに書いてください。わたしたちは、もう友達。》

友達？ とたんに心がすうっと冷えた。教室中の人が僕を見ている。興味しんしん、という目もあれば、かわいそう、という目もある。僕とは全然違う外見で、全く違う言葉を話す人たち。

今戦っているのは、親戚のように思っていた隣の国だ。僕らと同じような外見を持ち、似た言葉を話す人たち。それなのに気がつけば、敵どうしになってしまっていた。

隣の国とさえそうなるのに、こんな異国の人たちと、友達になんてなれるものか。

父さんがいなくなって、「陽気なイーゴリ」もどこかに行ってしまった。代わりに闇が心に広がっている。僕はタブレットを払いのけ、ただ無言でうつむいた。

けれど、次の日からクラスメートたちは、何度も翻訳アプリで話しかけてくる。

《好きな食べ物は何？》《好きなスポーツは？》《誕生日はいつ？》

無視しても、またしつこく聞いてくる。ある日、《今、何がしたい？》と聞いてきたやつがいた。闇の心のままで、僕はタブレットを取り上げる。本当に自分がそうしたいのか、よくわからない。ただ父さんのことを思うと、こう言わなければいけない気がした。

《兵士になって戦いたい。早く大人になりたい。》

その場にいた全員の顔がこわばった。困りきったように、タブレットから目をそらす。その日から先生以外、僕に話しかけてくる者はいなくなった。

そうして春は過ぎ、夏も過ぎ、今はもう秋だ。戦争はいつまで続くのだろうか？

僕は一学期の途中から、教室ではなく、図書室や保健室で過ごすことが多くなっていた。独りはすつ

きりさわやかで、同時に心がすうすうした。すうすうした心は、なぜか石みたいに重かった。

《イーゴリさん、一日に一時間でいいです。教室で授業を受けましょう。》

担任の先生にそう勧められて、一日一時間だけ授業を受けた。日本語がわからなくても何とかなる、体育とか音楽、理科の実験なんかを選んだ。

けれど今日はそのどれもがなかったので、しかたなく保健室から図工室へ行き、やる気もないのでただ机にうつぶしている。不意に、頭のてっぺんに風を感じた。

「きゃっ。」

女子たちの声に顔を上げると、何枚かの画用紙が宙に舞い、僕の足もとに飛んできたところだった。風が強く図工室に吹き込んできて、窓付近で描いていた子の画用紙を吹き飛ばしたんだ。

しかたなく、のろのろと手を伸ばしてその画用紙を拾い上げ、僕ははっと息をのんだ。描かれていたのは父さんの畑だった。なつかしい、ウクライナの風景だった。

空の下に広がる小麦畑。上半分は空の青。下半分は、たわわに実った小麦の黄色。

「ごめん。それ、あたしの。」

顔を上げると、女の子がおずおずと僕に向かって手を伸ばしている。最初の日、僕にタブレットで話しかけてきた子だ。《もう友達》と書いてきた子だ。

僕はその絵を返すことができなかった。なぜこの子は小麦畑を描いたのだろう？ かわいそうなウクライナ人への同情か？

図工担当のおじいさん先生が、タブレットを片手に近寄ってきた。

《それは、たんぼの絵です。米が実っています。》

これは小麦の絵ではなかったのか。言われてみれば、実った穂先が小麦とは違う。小麦の穂先は空に向かって伸びている。けれどこの絵の穂先は、地面に向かって垂れている。

《米は日本人が、昔から食べている穀物です。イーゴリさんも、給食で食べています。》

確かに日本に来てから、米をよく食べている。特におにぎりはおいしいと思った。マヨネーズであえたツナが入ったおにぎりは、母さんもルダもお気に入りだ。

《来月、学校で図工展があります。》

今度はさっきの女の子が、翻訳アプリに言葉を打ち込んだ。

《六年生のテーマは「わたしの大切な場所」です。六年間の思い出が詰まった、大切な場所。それが写真に撮り、絵に描いています。》

何人かのクラスメートが、自分の絵を僕のほうに向けて見せてくる。

いろんな場所が描かれていた。

校庭のバスケットゴール。丸い時計がはめ込まれた校舎。中庭の小さな池。

町の運動公園。れんが色の図書館。高台から見える海。

《わたしが描いたのは、祖父のたんぼです。通学路のそばにあります。悲しいとき、つらいとき、成長する稲を見ると心が落ち着きました。》

僕はその子の絵や、ほかのクラスメートたちの絵を、ただ見つめた。

ウクライナ人の僕に大切な場所があったように、日本人のこの子たちにも、大切な場所がある。そ

の光景を忘れないよう、こうして絵に描いているんだ。ずっと覚えていたいから。これからも自分の支えにしたいから。外見も言葉も違うけど、僕らは同じ気持ちを持っていた。

《僕も描きたい》

翻訳アプリにそう打ち込むと、図工のおじいさん先生はぱっと顔を輝かせ、新しい画用紙と下書き用の鉛筆を出してきてくれた。

真っ白な画用紙の上に、僕は鉛筆を走らせる。地平線まで続く、広い広い小麦の畑。その穂先は風になびきながらもすっきりと立ち、まっすぐに天を目指すかのようなだ。空には綿をちぎったような雲が、穏やかに浮かんでいる。畑を見守る男の人の後ろ姿。僕の、父さん――。

「ほう。」

図工の先生が、うなずいている。

「イーゴリ、すげえ!」「すげえ、じょうず。」

何人かが、声を張り上げた。「すげえ」がほめ言葉なのは、もう知っている。爆弾で破壊されてしまったけれど、十五歳になったら美術学校に入学するつもりだった。将来は絵描きになりたかった。

なりたかった? いや、今もなりたい。大切な僕の国の風景をキャンバスに描いて、世界中の人に知ってもらえたら。そしていつか、「陽気なイーゴリ」にもどれたら。

クラスメートたちに囲まれながら、僕は鉛筆を動かし続ける。

安田夏葉 児童文学作家。著書に「むこう岸」「セカイを科学せよ!」「アナタノキモチ」などがある。



詩織には、人の心の音が聞こえる。

相手の考えていることが読めるわけじゃない。ただ、音が聞こえる。詩織はそれを、心の音と呼んでいる。

心の音は、一人一人違う。

例えば、おばあちゃんの音は、シだ。

詩織のおばあちゃんは、隣町でピアノ教室をやっている。詩織も少しだけ習ったことがある。おばあちゃんは穏やかで優しく、でも指導はしっかり厳しかった。

そんなおばあちゃんのシは、りと澄みきっていて、美しい。おばあちゃんらしい音だ。心の音は、その人自身を表すのだと思う。

去年亡くなったおじいちゃんの音はミで、おばあちゃんのと、きれいに響き合っていた。元バイオリニストのおじいちゃん。二人は本当にぴったりのペアだった。

そう、音には相性がある。

例えばドとソのペアは安心感があるけど、ファとシだと、きれいだけど少し不穏な感じ。ドとド#になると、かなり不快な、耳障りで濁った音になる。

偶然三人とも同じクラスだったから、自然と三人でつるむようになった。でも……。

佳奈美の音はドで、唯の音はレ。

ちよつと弾いてみれば分かるけど、隣り合うこの二音の組み合わせは、とても座りが悪い。お互い主張し合っていて、調和しない感じだ。

この二人もそう。

佳奈美に言わせると、唯は「気取っててえらそう」だし、唯にとっては、佳奈美は「子どもっぽくて付き合ってもらえない」らしい。けんかするほどではないけど、佳奈美と唯は、いつも小さなことで言い合っている。

だから、詩織は最近、いつもぴりぴりしている。

佳奈美とくだらない冗談を言い合いたいけど、唯にあきれられるかな、とか。唯と昨日読んだ本の話をしたいけど、佳奈美にかしこぶってるって言われるかな、とか。それぞれと二人きりのときはこんなこと思わないのに、三人いっしょになると、どう振る舞っていいか分からなくなるのだ。

だから、周りの人の心の音を聞けば、何となく相性が分かる。この二人は親友になるかも、とか、この二人はうまくいかないな、とか。まあ、詩織は別に友情アドバイザーとかではないので、口には出さないけど。

というか、こんなこと人に話せっこない。

何より困るのが、自分自身の心の音は聞こえないってこと。そのせいで、詩織は今、悩んでいる。

佳奈美の音はドで、唯の音はレだ。

佳奈美は、詩織が一年のころクラスで初めて仲良くなった友達だ。バレー部で、えりあしを刈り上げるくらい髪が短くて、歯に衣着せぬ豪快な性格。

佳奈美のドは、ラツパみたいなの、楽しい音。

対して唯は、詩織と同じ美術部で、いつでも冷静な秀才タイプだ。背筋をぴんと伸ばし、長いポニーテールを揺らして歩くさまがかっこいい。

唯のレは、お琴のような、潔い音。

佳奈美も唯も、詩織の大切な親友だ。二年になって、

で、ついに、ある日の放課後。

「詩織、うちらといっしょにいて楽しい？ 最近の詩織、何かつまらないんだけど。」

佳奈美にずばつと言われて、詩織は、動けなくなった。まるで心臓が止まったみたい。

「佳奈美、そんなふうにするな、いいじゃないよ。」

唯の言葉もまた、鋭くとがっていた。

「は？ 唯だってそう思ってるくせに。」

「それにしたって、言い方があるでしょ。」

「うるさいな、唯は黙っててよ！」

二人は大声で言い合い始めた。止めたいけれど、どっちの味方をすればいいんだろう。結局何も言えない。

そこで、ふと気づいた。

もしかして、三人がうまくいかないのは、私のせい？ 二人の心の音の相性が悪いのだと思っていたけれど、実は私のほうこそ、調和を乱す存在なのでは？

「あの、えっと、ごめん！」

そう言い残し、詩織は逃げ出してしまった。

「あらあら、それはたいへんでしたね。」

詩織の足は、自然と、おばあちゃんちに向かった。

心の音のことを知っているのは、おばあちゃんただけだ。ほかの家族にも話したことはあるけど、真面目に取り合ってもらえなかった。おばあちゃんだけが「似たような人を知っていますよ。」とうなずいてくれたのだ。

おばあちゃんちのピアノの部屋。グランドピアノの前のソファに座り、詩織はつぶやく。

「私、何かちょっと疲れちゃった……。」

すると、おばあちゃんは立ち上がり、

「どうやら、詩織には調律が必要みたいですね。」

そう言っ、誰かに電話をかけた。

「調律の相談を頼める？ 今すぐ。ええ、今すぐ。……」

ふふふ。何度も言わせないで。今すぐよ。」

受話器の向こうで誰かの焦った声が出たけれど、おばあちゃんは謎の迫力で抑え込み、電話を切った。

で、数十分後。

「緑子さん、困りますよ！」

汗だくでやってきたのは、くたびれた作業着を着た男性だった。肌は生白く、髪はぼさぼさ。大学生のようにも、四十代くらいにも見える。おばあちゃんを緑子さんと呼ぶなんて、いったいどういう関係なんだろう。

「詩織、このかたは調律師の神崎さんです。神崎さん、こちら孫の詩織。」

おばあちゃんは簡単に紹介を済ませると、

「じゃあ、よろしくね。」

と言って、別の部屋に引っ込んでしまった。

ピアノの調律なら、詩織も一度見たことがある。調律師さんがやってきて、音のずれや、鍵盤のタッチを調整してくれるのだ。でも、それって楽器の話でしょう？

詩織が戸惑っていると、神崎さんは耳に手を当て、小さな音を聞くようなしぐさをした。そしてやぶから棒に、

「あー、ずれてるね、確かに。」

「えっと、ずれてるって、何が？」

「音。君の。」

どきっ。この人、今、何て言った？

神崎さんはチューニング用のハンマーを取り出すと、手のひらをたたいて調子を取りながら、尋ねた。

「何があつたか、聞かせてもらえますか？」

詩織はまごつきながら、これまでのことを簡単に話した。心の音のことも。

神崎さんは詩織の話を疑ったりしないで、素直に聞いてくれた。まるであたりまえのことみたいに。そして詩織が話し終わると、

「ふーん、なるほどね。」

神崎さんはおばあちゃんのピアノの前に座り、人差し指で鍵盤を押さえた。

ド。佳奈美の音。

それから、レ。唯の音。

最後に二音を同時に……うっ。やっぱり、嫌な響き。

思わず渋い顔になる詩織に、神崎さんは言った。

「ソね。」

「え？」

佳奈美と、唯と、詩織の音。

ちよつと緊張感はあるけど、二音だけのときよりずっと座りがいい。暗闇から明るい方へ抜けるような音。何かが始まりそうな音。

「悪い組み合わせじゃないよ。ミとかシが加わるとさらにいい感じになる。」

神崎さんはその五音を奏でた。ド、レ、ミ、ソ、シ。Cメジャーメロディという和音らしい。

「ドとレ、レとミ、ドとシはそれぞれ不協和。だからこ

のコード全体も、分類としては不協和音ってことになる。でも、きれいでしょ。」

「はい。」

まるで天使が降り立ったみたいだな、心地のいい和音だ。これが本当に不協和音なの？

「相性が悪い音どうしの組み合わせでも、間に別の音が入るだけで安定することがあるってこと。人間も同じ。」

神崎さんはピアノの蓋を閉じ、詩織を見た。

「その子たちも、二人きりだとうまういかないけど、君がいることでバランスが取れてるんじゃない？」

「え、でも……。」

詩織はそうは思えなかった。最近の詩織たち三人は、明らかにがたついていて。さつき聞いたみたいだな安定した音を奏でているとは、どうしても信じられない。

「だって、ずれてるもん。君の音。」

神崎さんはまたハンマーを取り出して、詩織を指す。

「ほかの二音に引張られて、中途半端にずれちゃってる。君の本来の音が出てない。」

「あ……。」

確かに。最近の詩織は、二人の顔色をうかがってばかりで、全然言いたいことが言えなくて。そんなだから、いつのまにか自分の音がずれていって、三人の音が合わさったとき、きしみが生じていたのかも。

「ま、濁った響きが悪いわけでもないんだけどね。」

神崎さんはハンマーで自分の肩をたたきつつ、

「プロペラみたいにバリバリした音の組み合わせや、ガシャンと割れるような不協和音だって、考えようによっちゃ刺激的でおもしろい。そう思わない？」

詩織がうなずくと、神崎さんは続けた。

「人間関係って、仲がいいと悪いの二種類だけじゃないでしょ。大好きなのに、いっしょにいると疲れるとか。気が合わない相手だけど、ペアを組むとなぜか仕事はかどるとか……ほんと複雑。でもだからこそ、おもしろい。ぼっちり気の合う相手だけが正解じゃないよ。」

神崎さんの言葉は、ちよつと難しかった。でも詩織は真面目な顔でうなずいた。

「いずれにせよ、君の音のずれを直すためには、一回ちゃんと本音を話してみないとね。三つどもえの大戦争になるかもしれないけど。」

詩織はプツと吹き出した。

「それが調律なんですか？」

「そうだよ。」

でも神崎さんは大真面目だ。

「無理してずーっと弦を張り詰めてたら、疲弊して、あるとき、ぷつんといっっちゃうよ。」

神崎さんは最後、ちよつとだけ笑って、言った。

「頑張ってね、詩織さん。」

次の日の朝。佳奈美と唯が二人して頭を下げるから、

詩織はびっくりしてしまった。

「詩織、昨日はごめん。二人で話し合って、ちゃんと謝ろうって……。」

佳奈美が素直に謝るなんて、珍しすぎる。それに、二人で話し合ったって……。

詩織は唾を飲むと、勇気を出して、言った。

「私のほうこそ、ごめん。なかなか本音を言えなくて。二人に嫌われたくなかったの。」

すると、佳奈美は気まずそうに頭をかき、

「やっぱ、うちのせいで無理させてた？」

「え？」

「心配しなくて大丈夫だよ。うちら、これでもそれなりに楽しくやってるから。」

「え……そうなの？」

てつきり、お互いぎすぎすしているのかと。

唯はポニーテールをたらんと揺らし、言った。

「詩織がいなかったら、佳奈美みたいなタイプの子と付き合うことなんてなかった。」

「それな。けっこう新鮮っていうか、おもしろいよ。」

「たまにむかつくけど。でも、友達でしょ。」

唯と佳奈美がほほ笑むと、詩織の胸が暖かくなった。

緊張が緩み、心に風が吹き抜ける。詩織は自分の心の中で、澄んだソの音が鳴るのを聞いた。



オガワメイ
絵・にじださこ

野球場から、わっと歓声が上がった。

「あ、たいへん！ 試合、始まっちゃってる。良太、急いで。」

お母さんが振り向いて、ぼくをせかした。窓口で、ユニフォームを着た高校生のお兄さんからチケットを買うと、お母さんはコンクリートの階段を駆け上がっていく。ぼくは、しぶしぶその後をついていった。

今日は、夏の高校野球の地区予選一試合目。高校三年生の兄ちゃんが、この試合に出ている。

「一回の裏だ。0対0ね。うんうん、おさえてる。」

お母さんが、得点表を見て、うなずいた。

「ふん、どうせ負けるにきまつてるよ。」

ぼくが鼻を鳴らすと、お母さんはこわい顔でにらんだ。

「なんてこと言うのよ。健太が毎日朝早くから練習がんばっていたの、良太だって知ってるでしょ？」

「知ってるけど。」

兄ちゃんが通っている高校の野球部は、正直強くない。いつも一回戦負けだ。

「お母さんだって、これが最後の試合だと思ってるんじゃないの？」

そう言いたかったけれど、言葉をのみこんだ。早起きが苦手なのに、毎日五時に起きて、朝練に行く兄ちゃんのために、張りきってお弁当を作っていたのを知っているからだ。今日だって、大きな飾り文字で「勝利！」って書いた手作りのうちわを持っている。

「さ、応援するよ。」

お母さんは、内野側の応援席に座ってメガホンをポカポカたたき始めた。

「健太あ、がんばれえ！」

前に座っていたおじさんが、びっくりした顔をして振り返った。ああ、恥ずかしい。

本当は、応援に来たくなかった。今日の朝、兄ちゃんとけんかしたばかりだったからだ。ぼくが悪いんじゃない。い。

昨日、お母さんは「暑苦しいから。」って、ぼくの髪をバリカンでカット。そのとき、バリカンの設定を間違

えて、いつもより短いつんつるのぼうず頭になってしまったのだ。

「いいじゃない、すずしそうで。まだ小学生なんだし。」お母さんは笑ってごまかしたけれど、ぼくは泣きたくなかった。小学生っていったって、もう五年生だ。月曜日、学校でみんなに笑われるにきまつている。切ってしまつた髪の毛はすぐには元にもとらない。絶望して、鏡の前で何度もため息をついた。

昨日、練習で帰りがおそかった兄ちゃんは、今朝、トイレの前でぼくの頭を見るなりげらげら笑った。

「うっわあ、頭が青い！ 一休さんだ。」
ぼくは腹が立って、兄ちゃんの左足のすねを思い切り飛ばした。兄ちゃんは、一瞬、痛そうな顔をしたけれど、すぐにけろつとして、

「おまえのけりなんか、『へ』でもねえよ。」

と、ぼくのおなかにがつんとボディブローをくらわせた。

それから「ばあか。」と言うと、すぐにかばんを持って、

相手のチームみたいに補欠がたくさんいるわけじゃないから、最後まで一人で投げきらなければならぬのだ。勝てるわけがない。

と書いていたけれど、兄ちゃんは四回まで切れのいいピッチングで、相手チームを0点におさえている。何度か外野に球が転がって、ひやつとしたけれど、兄ちゃんのチームの選手もファインプレーでがんばっている。

兄ちゃんのチームにも、まだ得点が入らず0点のままだ。

これは、もしかしたら勝てるかも。

ぼくは、兄ちゃんのチームのがんばりを見て、ちょっとだけ勝利を期待し始めていた。

汗が目の横を流れる。ハンカチを取ろうとして、ズボンのポケットに手をつっこんだら、忘れていたものが出てきた。

今朝、兄ちゃんに渡そうとしていたお守りだ。近所の神社の「勝ち守」。黒いふくろの真ん中に、赤い龍の絵

家を出ていった。痛くて、くやしくて、ベッドの中でふとんをかぶって、しばらく泣いていた。
「自分だって、ぼうず頭のくせに。兄ちゃんなんか、大きらいだ。こんな試合なんか、負けちまえ。」

相手のチームは、全国大会に出場したこともある強豪校だ。席がうるまるほど応援する人たちがたくさんいて、にぎやかだった。

黒い学生服に、はち巻きをした応援団が、金色の管楽器の音楽に合わせて応援歌を歌い、きらきらのぼんぼんを持ったチアリーダーが、おどつたりはねたりしていた。かたや、兄ちゃんの学校の応援は、選手の身内らしき家族連ればかり。観客席もがらがらだ。すでに、応援で負けている気がする。

兄ちゃんは、ピッチャーだ。

「うちは部員が少ないから、ピッチャーできるやつがほかにいないんだよな。」

前に、兄ちゃんが話していた。

と「勝」の文字が入っている。いかにも強そうで、勝負事に勝てること評判だ。

「結局、渡しそびれちゃったな。」

五回裏から、兄ちゃんのピッチングは急にコントロールが悪くなった。なかなかストライクがとれない。

七月の太陽が、じりじりと照りつける。暑そうだ。兄ちゃんは、マウンドでゆっくりと汗をぬぐう。つかれているみたいだった。

満塁。アウトはまだ一つ。

——カキーン。

高い音がひびいた。

相手のバッターが打ったボールが、観客席のネットの方まで飛んだ。ぼくは、息をのんで小さなボールを目で追いかけた。

ホームラン！

わあつと、相手の高校の応援が盛り上がった。相手チームに四点が入った。

「やっぱり、だめか。」

ぼくは、止めていた息をふうつとはいた。

そのとき、マウンドの兄ちゃんが、足の付け根の辺りをさすっているのが、目に入った。足を曲げたり、のぼしたりしている。

「健太、足でも痛いのかしらね？」

お母さんが、首をかしげている。朝、ぼくがけつたほうの足だ。

「まさか、あのとき？」

ぼくは、いのるようにお守りを両手でぎゅつとにぎりしめた。

負けるな。がんばれ、兄ちゃん。

「兄ちゃん、がんばれえ！」

自分でも不思議なくらい、大きな声が出た。兄ちゃんが、ぼくたちがいる方を見た。

「健太あ！」

お母さんも、はでなうちわを振り回しながら、大きな声でさけんだ。

「兄ちゃん、がんばれえ！」

兄ちゃんに、聞こえますように。力を出せますように。

そう気持ちをこめた。

相手チームの応援が盛り上がりつつあったから、ぼくたちの応援はおそらく聞こえていない。それでも、ぼくはありったけの声で応援した。

その後も、兄ちゃんのひどいピッチングは続いた。ぼろぼろだった。

結局、五回裏に十点を入れられて、コールド負けになった。

試合終了のサイレンが鳴る。

兄ちゃんは、その場でうつむいていた。

遠くてよく見えなかったけれど、泣いていたのかもしれない。チームの仲間が、兄ちゃんの所にかけてきて、優しく肩をたたいている。整列して、あいさつをした後に、ぼくたちのいる観客席の前に並んで帽子を取った。それから、観客に向かっておじぎをした。

「ありがとうございます！」

拍手が起きた。

兄ちゃんにとって、高校最後の試合。

弱小チームだけど、毎日一生懸命練習していたこと。

ぼくは、兄ちゃんをほこらしく思った。

だから、精いっぱい拍手をした。となりを見ると、お

母さんは、汗まみれでなみだを流していた。

試合の後、野球場の外で帰り支度をしていた兄ちゃん
は、ぼくに気がつくとい歯を見せて、にっこり笑った。

「コールド負けなんて、情けねえよな。」

「うん。でも、いい試合だった。」

「まじで？ おれは後悔だらけだけど。」

「うん。ぼくも。」

兄ちゃんは、ははっと笑った。

「何で、おまえが？」

「朝、足をけつたこととか、ごめん。」

「なんだ。言っただろ。おまえのけりなんて、効かねえよ。」

私の仕事は「日記」です。

「えっ？」って思いませんか。日記って、毎日を記録するものですよ。それが仕事になるなんて。小中学生も、社会人も、さまざまな職業の人がそれぞれの立場から日記を書きます。日記を書くことが仕事になってしまったら、その人は日記に、日記を書いたことを書くんでしょうか。それってつまらなさそうですね。

私はもともと会社に勤めていました。毎日、日記を書いてインターネットで公開していたら、ありがたいことに興味を持って読んでくださるかたが現れて、本にしませんかということになって、さらたたくさんのかたのもとへ届いて、そうしたら今度は、日記の書き方をしゃべってみませんか、教えてみませんかと依頼が舞い込むようになって、しゃあしゃあとして話し、その間も日記を書いて、売って、そのうち会社を辞めました。今では日記だけではなくエッセーもたくさん書かせてもらって暮らしていますが、やっぱり、得意なのは日記です。そんな人がいるの、ちょっとおもしろくないですか。

日記には「日記を書いたこと」は書きません。そこらで見たり聞いたことを書くのが好きです。

昨日の日記には、夕方の五時に自宅の周辺を歩いていたときのことを書きました。防災無線から音楽が鳴るのを聞いた人が、となりの人に「これ、この街の五時のチャイム。」と言ったんです。「へえ、な

んか変わってるね、『夕焼け小焼け』じゃないんだね。」「そう、『夕焼け小焼け』じゃないんだよね。」

私の街の五時のチャイムは、ほかの地域では聞かない独自のメロディーなんです。

みなさんは、日記が宿題に出たことはありませんか。何を書きましたか。きつとおもしろいだろうなと思います。日記の書き方を話しに行くと、会場に来るかたにぜひ日記を見せてくださいとお願ひしています。どのかたの日記も、とてもいいなあと思います。その人だけの暮らし、本当だったら誰も知りえないはずのことが書いてあります。

こうすればもっと伝わるかもしれないなと思うことがごくまれにあります。それは「楽しかった」「うれしかった」「悲しかった」と書いてあったときです。

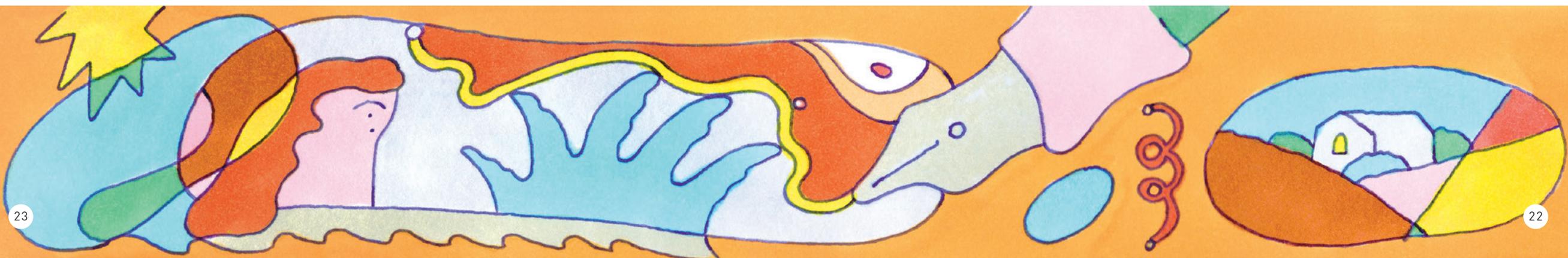
私はちよつといじわるだから、「本当かな？」って思っちゃうんですよ。

五時のチャイムの二人の会話を聞いて、私は自分がどう思ったか、感情を言葉で確かに書き留めるのは難しいと感じます。愉快だったのかな、誇らしかったのかな、うれしかったのかな。でも、無理して気持ちを書かずに、ただ街の五時の合図を誰かが誰かに紹介して、私も改めて、ああこの街のチャイムは独特だなあと確認した、それだけ書いてあれば事柄からあふれる手ざわりを説明しなくても自分で感じられるし、読んだ人にも伝わるんじゃないかと思うんです。

そこで何があったのかをよく見て、聞いて、そうして書いてみる。すると、日記はもっと、自分に近しく、そしてきつと誰かに届くようになります。書いたことで、もしかしたら実は「楽しかった」「うれしかった」「悲しかった」じゃない別の感情がそこに隠れていたことに気がつくことも、よくあります。でも、実は私、みなさんにはあんまり日記が上手になってほしくないんです。ライバルがこれ以上増えたら、困ります。

古賀及子 エッセイスト。著書に「ちよつと踊ったりすぐにかけだす」「おくれ毛で風を切れ」などがある。

絵・竹井晴日



こんにちは。私は大学の教員をしていて、魚の遺伝子のはたらきを調べ、それを日常生活に生かせるように研究しています。そして研究成果を活用して作った魚が一般に販売されるようになりました。こんなふうに思っていることが現実になり、研究者として充実しています。

でも、私は小さいときから「研究者になりたい」と思っていたわけではありません。小さいときから思い描いていた「将来」のとおりになったのではないのです。というか、将来のことは全然考えていませんでした。今日は、そのお話をしたいと思います。

家族が犬やねこが好きで、私が物心ついたときから我が家にはペットがいました。いつも何匹かの犬やねこがいて、ご飯をあげたり、散歩に行ったり、いっしょに眠ったり、生き物の世話をすることを楽しみながら、どんなことをすればペットが喜ぶのか観察していました。ねこはなでられて気持ちがいいと喉をゴロゴロ鳴りますが、ねこによって気持ちのいい場所が違ってきます。それから、小学校の頃には友達と網を持って川へ行き、ドジョウやフナを捕まえていました。でも、釣りは好きではありませんでした。というのも魚の口に刺さった針を外すとき、魚の口が裂けたり、死んでしまったりするのが嫌だったからです。

それから、機械を分解するのも好きでした。父親の動かなくなった電気かみそりのねじを一つずつ外して、中はどんなふうになっているのか、どんな仕組みでかみそりの刃が動いているのか、どんな順番で組み立てられるのかなど自分で確かめるのを楽しみにしていました。もちろん、元どおりに戻すことはできず、ばらばらになったものはごみ箱行きでしたが。

複雑な機械だけでなく、祖父母や母親が昔ながらの方法で日常的にやっていることの中でも「なるほど、うまくできている」というのを見つけることも楽しみでした。例えば、勝手口の扉にほうきがぶら下げられているのですが、ほうきの柄の部分に空いている穴に枯れ枝を通し、それを扉の格子に引っ掛けているのです。今ならS字フックを使いますが、身近にあるものでできてしまうのです。大人になった今でも、「工夫がいっぱい」という点でNHKのピタゴラスイッチは大好きな番組です。

こんなふうに子どもの頃は、生き物も機械も自分で観察して、その中で生かされている「工夫」を見つけることが好きでした。

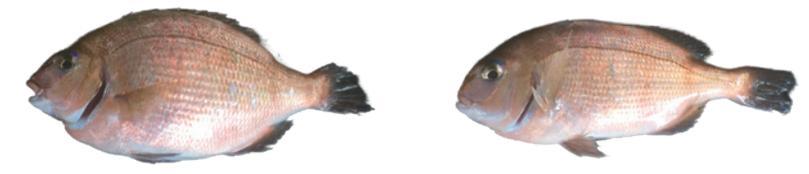
大学を選ぶときは「生き物に関わるのがいいかな」という程度の理由で農学部を選びました。理科学系の研究室なので、日々実験をします。実験をして結果が出ると「どうしてこうなるんだろう」という疑問が出てきて、また、実験をします。そのとき、こんなふうに実験すると結果が分かりやすいのではないかと考えを巡らします。やっぱり、小さいときと同様に、工夫を凝らし楽しむ毎日でした。大学と大学院では、魚の筋肉成分に関する研究をしていたのですが、大学院を修了する頃に「分子生物学」というDNAや遺伝子に関する研究がどんどん発展し始めました。ある生物の遺伝子をまとめたものをゲノムといい、ゲノムは生物の設計図といわれています。つまり、遺伝子は生物の設計図の一部で、それを調べることで「生き物の特徴はどんなふうにならされているのか」が理解できます。遺伝子のはたらきを調整することで「特徴を変えていく」ことができるようになり始めたのです。この技術を使って「社会に役立つことをしたい」と思うようになりました。

そこで、私はメダカを使って魚の遺伝子の研究を始めることにしました。遺伝子のはたらきを調べるためには、受精したばかりの卵に調べたい遺伝子を注入する必要があります。でも、当時その方法が確立されていませんでした。まず、その方法の開発から始めました。どうしたら受精したばかりの卵を効率よく集められるか、どうやって卵を動かないように固定しようか、注入するための針はガラス製で手作りなので針の太さはどのくらいがいいのかなど、試行錯誤を繰り返して方法を開発していきました。魚の種類によって卵の形や性質が異なりますが、メダカでの経験を生かして、今では多くの魚の卵に注射することができるようになりました。そして、遺伝子情報を利用して魚の特徴を改良し、筋肉（人が食べる部分）が多くなったメダカや成長速度が早くなったトラフグなどを販売できるようになりました。

私の場合、子どもの頃からしっかりと将来の目標を立てて進んできたわけではなく、「楽しみ」「興味」で続けてきた「自分で調べる、自分で確かめる、そして工夫して何かを作る」が今の自分になっています。

みなさんも「楽しいこと」を見つけて続けていってください。きっと楽しい人生になると思います。

木下政人 分子生物学者。京都大学大学院農学研究科 准教授。著書に「22世紀からきたでっかいタイ ゲノム編集とこれからの食べ物の話」がある。



「肉厚マダイ」(左)と通常のマダイ(右)

上の写真の「肉厚マダイ」は、通常のマダイのDNAの一部を除いてつくられた、筋肉が増えたマダイである。

学校あるある

学校でよくある出来事を、ねこの兄弟、タマとマルが楽しくしょうかいします。

伊藤ハムスター



みんなの「あるある」大募集!

みなさんの学校の「あるある」を教えてください!
投稿はこちらから



職員室の冷蔵庫に、
「すごいおかしがり」
入っていると 噂になる



気がつくとはばきの裏に
「画びょうが」がささっている



ミルクの日には牛乳が足りない



●うどんちゃんからの投稿をもとに作成。ありがとうございました!

伊藤ハムスター イラストレーター。多摩美術大学油絵科卒業。「こども六法」などのイラストを担当。著書に「ぼくのへや」がある。

1 児童労働をなくす取り組み 「フェアトレード商品」について知る



チョコレートやコーヒー豆には、「フェアトレード商品」というものがあります。「フェアトレード」とは「公正な貿易」という意味で、生産者の労働環境や生活水準を守るために、児童労働力を使わずに生産されている商品です。このような商品を購入して、児童労働を減らす取り組みに参加することができます。お金がかかることなので、無理のない範囲で選択してみてください。

2 ほかの国の生活や産業に興味を持ち、自分のこととしてとらえる



世界で起きていることに興味を持ってみましょう。教育を受けられない地域ではなぜ教育を受けられないのか、原因を調べたり、考えたりして、自分ができていることを考え続けるということが大切です。また、ニュースなどで見聞きしたら、ひとごととして終わらず、「自分だったら」と考えてみましょう。思わぬところから、日本でできる支援が見つかるかもしれません。



SDGsについて学べるサイト「EduTown SDGs」でもっとSDGsの目標について知ろう。

ることがあるので、同じ所へとどまるのが難しく、毎日学校へ通うことができないのです。

理由② 労働や家事
家族を支えるために、子どもが働いている場合もあります。ふだん学校があるお昼の時間に、果物やアイスクリームを町へ売りに行かなくてはならないので、学校へ行くことができないのです。チョコレートなどの材料であるカカオ豆を作るために、農場などで働いている子供もいます。ここには貧困の問題がひそんでいます。大人の労働による収入だけでは、家族を支えることができません。子どもが働いてお金をかせげないと、家族の食料が手に入らなかつたり、住む場所を確保することができなかつたりする



出典：公益財団法人 日本ユネスコ・アジア文化センター「用語集」

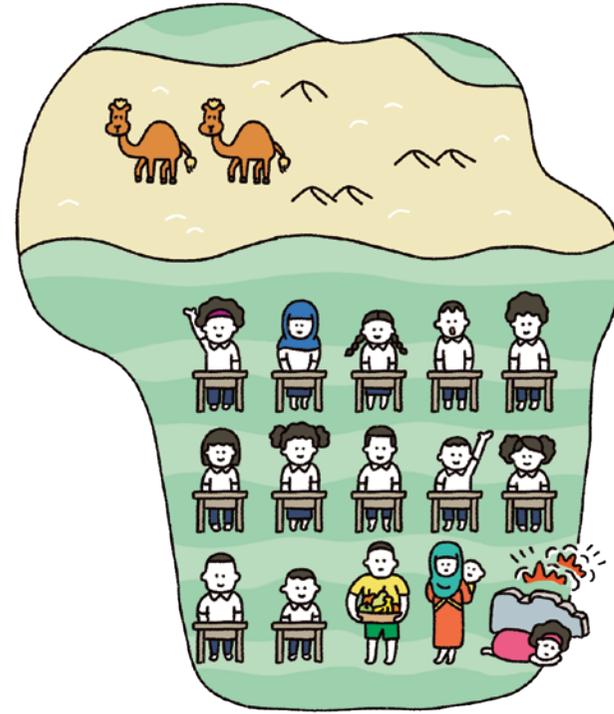
保することができなかつたりするので。

理由③ 男女の格差
日本では、識字率という、教育の水準の指標になる数値に男女で差はありませんが、世界には7億7500万人の非識字者がおり、その約三分の二は女性だといわれています。

世界のほかの国では、女性の役割は「結婚して子どもを産み、育てること、家事や介護をすること」という意識を持つ人たちがいて、女性は、学校へ行かせてもらえない場合があります。性別に関わらず、全ての人が教育を受けることができる世界にしていく必要があるのです。

そのほかの理由
教科書は、日本では無料で手に入れることができますが、ほかの国ではお金がかかることがあります。貧困のために、教科書を買うことができない子どもたちがいます。また、先生の数が足りず、子どもたちが教育を受けられない地域もあります。

学びの環境を整えることが大切です
学校に通う機会があつたとしても、教科書が買えなかつたり、先生が足りなかつたりして、教育を受けることができないことがあります。また、病気や障害などさまざまな理由で学校に通うのが難しく、質の高い教育を受けられないこともあります。「学校へ通う機会」を保障するだけではなく、「学ぶ場所の環境」を整え、保障していくことも大切なことなのです。



アフリカ大陸のサハラ砂漠以南の地域では、5人に1人の子どもが小学校へ通うことができません。

出典：公益財団法人 日本ユニセフ協会ホームページ

日本の小学校・中学校
日本では、全ての子どもが小学校に六年間、中学校に三年間、それぞれ通うことができます。小学校や中学校は、もともと、だれもが教育を受けられるわけではなかった時代に、どの子どもにも学習する機会を保障しようという目的で始まったものでした。

小学校や中学校で学習する機会が全ての子どもに公平にあたえられている日本に比べると、「だれでも小学校や中学校へ行きたいときにに行けるのがあたりまえじゃないの？」と思うかもしれません。でも、世界のほかの国では、教育を受ける機会にめぐまれていない子どもたち、学校へ行きたくても行くことができない子どもたちが大勢いるのです。

世界の子どもたちはどれくらい学校に通っているの？
世界では、どのくらいの割合の子どもが小学校へ通っていると思いますか？ 世界全体で見ると、約90%。残りの10%、つまり十人に一人は、小学校へ通うことができません。この十人に一人という数

字は、ヨーロッパや北アメリカ、日本といった、ほとんどの子どもが小学校へ通う機会を持つ国も含めた平均です。ヨーロッパや北アメリカでは、小学校へ通えない子どもは2%、つまり百人に二人程度で、割合が小さくなります。それに対して、小学校へ通えない子どもが特に多い地域があります。それは、アフリカ大陸のサハラ砂漠以南の地域です。この地域に限定すると、20%、五人に一人が、小学校へ通うことができないのです。中学校では、学校へ通えない割合がさらに大きくなり、約30%、三人に一人が中学校へ通うことができません。

なぜ、小学校や中学校へ通うことができない子どもたちが大勢いるのでしょうか。さまざまな理由がありますが、①紛争や戦争、②労働や家事、③男女の格差などが主なものとして考えられます。

理由① 紛争や戦争
紛争や戦争が起きて、急に兵士がやってくる、ばくだんが落ちてくるなどの危険にさらされるような地域では、安心して学校へ行くことができません。また、争いが起きている所から遠くにげるため引越したり、別の国へ行ったりす

*1 国や地域で、日常生活で用いられる簡単な文章を理解して読み書きできる人の割合のこと。

目で読むSDGs 図鑑

だれでも小学校や中学校に行けるってあたりまえ？

SDGsの目標4「質の高い教育をみんなに」では、だれもが公平に、よい教育を受けられるようにしていくことを目指しています。日本の子どもたちには、小学校・中学校で学習する機会が保障されています。しかし、それはあたりまえのことなのでしょうか。

絵をかくこと、民話を読むことが大好き！ 医師になつて おばあちゃんの病気を 治したい！



ラオス仏教の最高の寺院で、ラオスの象徴とも言える「タートルアン」の前に立つスックパソーンさん。

世界の友だちは、いったいどんな1日を過ごしているのだろう。放課後は日が暮れるまで外で遊んでいる？ それとも塾で勉強しているのかな？ 今回はラオスの首都・ビエンチャンに住む10歳のスックパソーンさんにお話を聞きました。

みんなは、ラオスがどこにあるか分かるかな？ ヒントは、中国の南、ベトナムの西、タイの北で、キリンの首のような形をした国だよ。ラオスは東南アジアで唯一、海に面していない国なんだ。山がちで地形で、面積は日本の本州とほぼ同じだよ。人口の半分は、国名の由来にもなった「ラオ族」。残り半分は50近くの少数民族が占める多民族国家なんだ。

「消える川」だよ。お気に入りの話は「よごれた川の影響で、村人たちの生活は苦しくなります。川にすむカメに、『もうこれからは川にごみを捨てない。清潔な川を守る。』と約束すると、カメは口から水蒸気を吹き出します。それが大きな雲になって雨が降り、川の水がきれいな状態にもどるといってお話です。人と自然のつながりが感じられるところが好きです。」

現代の環境問題やSDGsの考え方にも通じるお話だね。

スックパソーンさんの夢は、医師になること。おばあちゃんの病気を治してあげたいんだって。

「銀行員にもなってみたいな。だって、制服がかわいいから。」

真面目で好奇心旺盛なスックパソーンさんは、クラスでも成績上位。これからも一生けん命勉強して、ぜひ夢をかなえてね。



プロフィール

名前

Soukphasone Sihalath
スックパソーン・シーハーロード
(小学5年生・10歳)

好きなこと

絵をかくこと、ラオスの民話の本を読むこと、ビーズのネックレスやブレスレットを作ること

好きな教科

国語(ラオス語)、英語、中国語

好きな食べ物

フライドチキン、ラブ(みじん切りの肉とさまざまな調味料をあえたサラダ)、ケンノーマイ(たけのこスープ)

行ってみたい国

日本

日本について知っていること

ラーメン、すし、桜、ドラえもん、富士山

将来の夢

医師、銀行員

スックパソーンさんの1日

午前6:00 起床

歯みがきと洗顔後に、着替えてから朝ご飯を食べます。この日のメニューは、もち米、揚げソーセージ、とり煮込み、野菜スープ、トマトからしみそでした。



午前7:30 登校、自習

学校まではお母さんがバイクで送迎してくれます。



午前8:00 授業

1つの授業は50分と60分の2種類があり、合間に10分間の休み時間があります。この日の1~2時間目は国語(ラオス語)、3時間目は音楽でした。

午前11:20 昼休み

昼食は、持参したお弁当です。この日は、白いご飯、ぶたと卵の煮込み、果物でした。

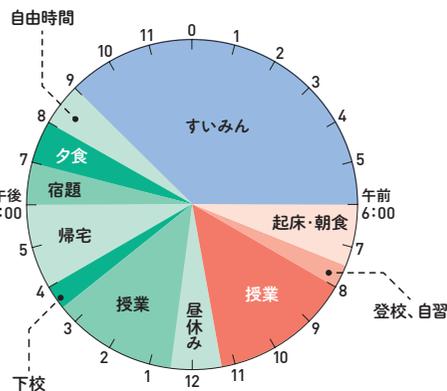
午後0:30 授業

午後からの4時間目は英語、5~6時間目は算数でした。

午後3:30 下校

午後4:00 帰宅

少し休んでから、シャワーを浴びます。それからいこといっしょに、ビーズでネックレスやブレスレットを作ったりします。



午後6:00 宿題

午後7:00 夕食

この日のメニューは、ご飯、揚げ牛肉、揚げ魚、パパイヤサラダ、生野菜、カリカリぶた皮でした。



午後8:00 自由時間

絵をかいたり、ラオスの民話の本を読んだり、テレビ番組を見たりします。



午後9:00 就寝

ラオス語の「こんにちは！」
ສະບາຍດີ (サバイディー)！
ラオス語の「ありがとう！」
ຂອບໃຈ (コブチャイ)！

ラオスの首都・ビエンチャンには、歴史ある寺院が数多く存在するよ。スックパソーンさんの自宅近くには、ラオスのシンボルとされる「タートルアン」があるんだ。高さ45mの黄金にかがやく仏塔があり、ラオスの国章(国家を象徴する紋章)にもえがかれている。近くには、「ワットタートルアンヌア」という豪華な宮殿もあって、ラオスの仏教界で最高位の僧侶が住んでいるよ。毎年11月には、1週間続く「タートルアン祭」が開かれ、ラオス全土から多くの僧侶がやってくる。例年約30万人もの人でにぎわい、広場には多くの屋台が立ちならぶんだ。タートルアン寺院の夜間のライトアップも見物だよ。



ラオス

ビエンチャンって、どんなところ？

面積 およそ3,920km²

人口 およそ98万5,000人

ラオスの首都。タイとの国境をなすメコン川の流域に位置しているよ。タイとは、全長1,174m、幅13mの「友好橋」で結ばれていて、バスや電車といった陸路で往来する旅行者も多いんだ。



毎年11月に開催される「タートルアン祭」の様子(左)。僧侶の会議や仏教の儀式などを行う「タンマ・ホール」(右)。

第二回 「青いスピ」作品募集

結果発表

入選作品は、「青いスピ」に掲載いたします。「がんばれ、兄ちゃん」は、本誌16ページよりお読みいただけます。「バトンとハナのあな」は、第七号に掲載予定です。

入選

「がんばれ、兄ちゃん」オガワメイ
夏の高校野球地区予選。良太の兄、健太は、弱小チームのピッチャーとして最後の試合にいく。試合前に兄とけんかした良太は、複雑な思いをかかえながら応援席に座る。0対0のまま試合は進み、5回裏。すると、健太の様子に変化が……。

「バトンとハナのあな」文月レオ

運動会の練習で、六年生が主体の応援団に、五年生で一人だけ仲間入りするところが決まったゆりちゃん。しかし、クラスメートの些細な一言が彼女の心をざわつかせる。笑顔の裏にかくされたゆりちゃんの本当の気持ちとは。

佳作

「七夕の空」にたくみこ
蒸し暑い土曜の朝、黄色い水筒を持って郵便ポストの前に座る少年が「ぼく」の目に留まる。かれは毎週郵便屋さんを待ち続けているようだが、その理由は分からない。ある日、かれの願いを知ることになるけれど……。

「幸せの四つ折りメモ」島田美里

バスケットでいそがしくなるハルナと、少しきよりができてしまった「私」。ある日、机の中で見つけたメモから文芸部の先輩との不思議な交流が始まる。心のきよりが縮まる中、文芸部を訪れた「私」が目にしたものは、予想外の光景だった。

第三回「青いスピ」作品募集には、210作品ほどの応募がありました。たくさんのご応募、ありがとうございます。厳正な審査の結果、次のとおり受賞作品を決定いたしました。

選評



最終選考にて。左から、安東みさえ先生、西本鶏介先生、椰月美智子先生。

入選「がんばれ、兄ちゃん」

あたりまえの日常をえがいているだけに、心に残る場面や言葉がたくさんあった。弟の良太の心の動きや子ど

もらしさを通して、兄弟の思いやりや

家族の日常が伝わってきた。(椰月)



選考委員 西本鶏介先生 (児童文学作家・児童文学評論家)

- だれもが共感できて、読みやすい作品だ。兄弟の愛情が分かりやすくえがかれていて、安心して読める。(西本)
- 最初、べたな内容だと感じたが、読み返すと胸にせまってきた。試合の様子や良太の心情など、バランスよくえがけている。(安東)

入選「バトンとハナのあな」

- 鼻の穴という題材が特徴的な作品。主人公に特別感があるため、共感しづ

らい読者もいるだろう。(西本)

- 鼻の穴を題材にした発想がユニークな作品。真面目でいることを笑わないというメッセージが感じられて、すがすがしい。読後感もよい。(安東)
- いじめを連想させる展開から始まり、途中でそうではない方向に転換するところがよい。主人公がポジティブで魅力的に感じる。(椰月)



選考委員 左：安東みさえ先生(児童文学作家) 右：椰月美智子先生(作家)

佳作「七夕の空」

- 情景描写が色彩豊かで、表現方法が多彩。ファンタジーと現実のあいまいな部分をねらっているところがよい。

●叙情的な作品で、おばあちゃんに手紙を届けたという設定がよい。作品後半の展開も温かい。ただし、郵便ポストの前で手紙を待つ少年の行動に少し違和感を覚えた。(西本)

- 雰囲気がよく、独特の世界観が感じられる作品。しかし、ラストの部分が取ってつけたように感じた。(椰月)

佳作「幸せの四つ折りメモ」

- SNS全盛の中、机の引き出しを利用して手紙のやりとりをする、という設定がよい。(安東)
- 読ませる力があり、上質な雰囲気のある作品。友達が部活に行ってしまう、一人ぼっちになることへのあせりなど、中学生の心情もよくえがけている。(椰月)
- 俳句を通じた交流は興味深い。しかし、てんさくの仕方が先生のおもしろみに欠ける。てんさくの内容はメモ程度であればよかった。(西本)

募集内容

小学校高学年から中学生を读者対象とした物語、小説。

応募規定

字数：400字詰め原稿用紙10枚以内。

書式：手書きの場合、400字詰め原稿用紙（縦書き）を使用してください。パソコンの場合、横向きA4用紙に、縦書きでお願いします。末尾に400字詰め原稿用紙で換算した枚数を明記してください。[手書き・パソコン共通] 原稿用紙の1行目に作品のタイトル、2行目に作者名（ペンネーム、あるいは本名）をお書きください。本文は3行目から書き始めてください。

A4用紙1枚に次の内容を明記し、同封してください。①作品のタイトル・枚数、②作者名（ペンネーム・本名）*、③住所・電話番号・Eメールアドレス、④年齢、⑤職業

*ペンネームの場合は、必ず本名も明記してください。ペンネーム・本名には、読み仮名を付けてください。

注意事項

- 応募資格の制限はありません。ただし、未発表の作品に限ります。他の児童文学雑誌やコンクール等に応募した作品は対象外です。
- 応募作品は第三者の著作権を侵害していないオリジナルの作品に限ります。また一人一点までとします。なお、応募作品は返却いたしませんのでご了承ください。

締切・発表

締切：2025年8月31日（日）当日消印有効

発表：「青いスピ」第8号（2026年4月発行予定）、およびWEB「青いスピ」

*掲載作品には小社規定の原稿料をお支払いします。なお、掲載された作品の出版権は小社に帰属します。

作品送付先

東京書籍株式会社「青いスピ」作品募集係
〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1

*「公募ガイドONLINE」よりWEB応募できます。

詳しくは、WEB「青いスピ」作品募集ページをご確認ください。



WEB 青いスピ

左の二次元コードか、以下のURLからアクセスしてください。
<https://bluespin.tokyo-shoseki.co.jp>
※インターネットの通信費がかかります。

お問い合わせ

✉ spin@tokyo-shoseki.co.jp

*審査結果に関するお問い合わせには応じられません。

選考委員

にしもとけいすけ 西本鶏介（児童文学作家・児童文学評論家）
あんどう みきえ（児童文学作家）
やづき みちこ 椰月美智子（作家）

【応募に関する個人情報の取り扱いについて】東京書籍では、ご提供いただく個人情報の処理について、適切な安全対策を講じ、漏洩、滅失および損が生じないようにいたします。つきましては、下記の内容をご理解いただき、ご同意の上で個人情報を提供くださるようお願いいたします。また、16歳未満のかたは保護者の同意を得た上でお申し込みください。■個人情報の利用目的・開示：ご提供いただいた個人情報につきましては、次の目的の範囲内で取り扱います。○選考作業および入選等のご連絡のため。○個人情報の属性の集計・分析を行い、個人が特定できないように加工したものを作成し、東京書籍のサービス開発・提供等を行うため。■個人情報について：法令等により必要と判断される場合を除き、本人の同意を得ずに第三者に提供することはありません。個人情報のご提供は任意ですが、応募いただくために必要なものです。ご記入いただけない項目がある場合、応募をお受けできない場合がありますのでご了承ください。■委託について：ご提供いただいた個人情報につきましては、選考や書類の発送など利用目的の実施に必要な範囲内で、業務を委託する場合があります。■窓口：ご提供いただいた個人情報に関する質問および変更等については、「青いスピ」編集部（spin@tokyo-shoseki.co.jp）へお問い合わせください。

青いスピ 第6号
（2025年 春）
2025年4月1日発行

発行者 渡辺能理夫
発行所 東京書籍株式会社
印刷・製本 株式会社リーブルテック
本社 〒114-8524 東京都北区堀船2-17-1
Tel:03-5390-7445（営業総機本部） Fax:03-5390-6012
支社・出張所 札幌 011-562-5721 仙台 022-297-2666
東京 03-5390-7467 金沢 076-222-7581
名古屋 052-950-2260 大阪 06-6397-1350
広島 082-568-2577 福岡 092-771-1536
鹿児島 099-213-1770 那覇 098-834-8084

ホームページ <https://www.tokyo-shoseki.co.jp>
東書Eネット <https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/>



読者アンケート



第6号の「青いスピ」
でおもしろかった作品や、
これから取り上げてほしい
ことを教えてください。

表紙絵 大宮お
アートディレクション 山田和寛 (nipponia)
デザイン 山田和寛+竹尾天輝子 (nipponia)